高松短期大学紀要　第二十三号　一～二十五頁（一九九三）

『源語』逍遙

大雲寺訪問

松原輝美

「下鴨」に詣でて「糺（ただす）の森」を脱（ぬ）け、表参道にかかって落ち初めた雨は、叡山電車の岩倉駅に降り立つ頃には傘を必要とする程の降りになっていた。平成四年十二月二十日、日曜日午後、洛北の冬は暖かく、雨は雪にかわる気配もなく静かに降った。

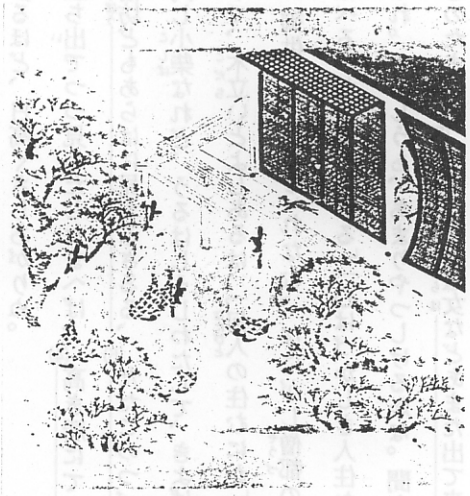
十月、大学が後期の授業に入って間もなくに始まった「秋期公開講座」の古典文学講座で、『源氏』の「若菜巻上下」を読んで終ったのが十二月十六日、それのアフターケアのような形で、『源語』の遺跡探訪に出掛けて来たのだった。同行五人、最初の目的地は、光源氏が紫の上を見出した「北山の某寺」のモデルになったという京都岩倉の「大雲寺」である。

源氏はそこを、年立の上では中将時代の十八歳の春に訪れている。

ゆゑある滝のもと

白鶴本「若紫」

春の日の垣間見



白鶴本「若菜上」

瘧病にわづらひたまひて、よろづにまじなひ加持など参らせたまへど、験なくて、あまたたびおこりたまひければ、ある人、「北山になむ、なにがし寺といふ所に、かしこき行ひ人はべる。去年の夏も世におこりて、人々まじなひわづらひしを、やがてとどむるたぐひ、あまたはべりき。ししこらかしつる時はうたてはべるを、とくこそこころみさせたまはめ」など聞こゆれば、召しにつかはしたるに、「老いかがまりて室の外にもまかでず」と申したれば、「いかがはせむ、いと忍びてものせむ」とのたまひて、御供にむつましき四五人ばかりして、まだ暁におはす。

(1)やや深う入る所なりけり。三月の晦日なれば、京の花ざかりはみな過ぎにけり。山の桜はまださかりにて、入りもておはするまに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、かかるありさまもならひたまはず、所狭き御身にて、めづらしうおぼされけり。(2)寺のさまもいとあはれなり。(3)峰高く、深き巌の中にぞ、聖入りゐたりける。上りたまひて、誰とも知らせたまはず、いといたうやつれたまへれど、しるき御さまなれば、「あなかしこや。一日召しはべりしにやおはしますらむ。今はこの世のことを思ひたまへねば、験方の行ひも捨て忘れてはべるを、いかで、かうおはしましつらむ」と、おどろき騒ぎ、うち笑みつつ見たてまつる。いと尊き大徳なりけり。さるべきもの作りて、すかせたてまつり、加持など参るほど、日高くさしあがりぬ。

すこし立ち出でつつ見わたしたまへば、(4)高き所にて、(5)ここかしこ、僧坊どもあらはに見おろさるる、(6)ただこのつづらをりの下に、同じ小柴なれど、うるはしうしわたして、きよげなる屋、廊など続けて、木立いとよしあるは、「何人の住むにか」と問ひたまへば、御供なる人、「これなむ、なにがし僧都の、この二年籠りはべるかたにはべるなる」「心はづかしき人住むなる所にこそあなれ。あやしうも、あまりやつしけるかな。聞きもこそすれ」などのたまふ。(7)きよげなる童女などあまた出て来て、閼伽たてまつり、花折りなどするもあらはに見ゆ。「かしこに女こそありけれ。僧都は、よもさやうにはすゑたまはじを、いかなる人ならむ」と、口々言ふ。下りてのぞくもあり。をかしげなる女子ども、若き人、童女なむ見ゆる、と言ふ。

君は行ひしたまひつつ、日たくるままに、いかならむとおぼしたるを、「とかうまぎらはさせたまひて、おぼし入れぬなむ、よくはべる」と聞こゆれば、(8)後の山に立ち出でて、京の方を見たまふ。はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなうけぶりわたれるほど、絵にいとよくも似たるかな。(9)「かかるところに住む人、心に思ひ残すことはあらじかし」とのたまへば、「これはいと浅くはべり。人の国などにはべる海山のありさまなどを御

覧ぜさせてはべらば、いかに御絵いみじうまさらせたまはむ。富士の山、なにがしの嶽など語りきこゆるもあり。

（中　略）

「暮れかかりぬれど、おこらせたまはずなりぬるにこそはあめれ。はや帰らせたまひなむ」とあるを、大徳「御もののけなど加はれるさまにおはしましけるを、今宵はなほ静かに加持など参りて、出でさせたまへ」と申す。さもあることと、皆人申す。君も、かかる旅寝もならひたまはねば、さすがにをかしくて、「さらば暁に」とのたまふ。

(10)日もいと長きに、つれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出でたまふ。人々は帰したまひて、惟光の朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。簾すこし上げて、花たてまつるめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに誦みゐたる尼君、ただ人と見えず。四十余ばかりにて、いと白うあてに痩せたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうつくしげにそがれたる末も、(11)なかなか長きよりもこよなう今めかしきものかなと、あはれに見たまふ。きよげなるおとな二人ばかり、さては童女ぞ出で入り遊ぶ。中に十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなれたる着て、走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじくおひさき見えて、うつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。「何ごとぞや。童女と腹立ちたまへるか」とて、(12)尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるところあれば、子なめりと見たまふ。「雀の子を犬君が逃しつる。伏籠のうちに篭めたりつるものを」とて、いとくちをしと思へり。このゐたる大人、「例の心なしの、かかるわざをしてさいなまるるこそ、いと心づきなけれ。いづかたへかまかりぬる。いとをかしうやうやうなりつるものを。烏などもこそ見つくれ」とて、立ちて行く。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とぞ人言ふめるは、この子の後見なるべし。尼君、「いで、あなをさなや。いふかひなうものしたまふかな。おのがかく今日明日におぼゆる命をば、何ともおぼしたらで、雀したひたまふほどよ。罪得ることぞと、常に聞こゆるを、心憂く」とて、「此方や」と言へば、ついゐたり。(13)つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かなと、目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似たてまつれるが、まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。尼君、髪をかき撫でつつ、「けづることをもうるさがりたまへど、

をかしの御髪や。いとはかなうものしたまふこそ、あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとかからぬ人もあるものを、故姫君は、十ばかりにて殿におくれたまひしほど、いみじうものは思ひ知りたまへりしぞかし。ただ今おのれ見捨てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ」とて、いみじく泣くを見たまふも、すずろに悲し。をさなごちにも、さすがにうちまもりて、伏目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたう見ゆ。

生ひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむそらなき

またゐたる大人、げにとうち泣きて、

初草の生ひゆく末もしらぬまにいかでか露の消えむとすらむ

と聞こゆるほどに、僧都、あなたより来て、「こなたはあらはにやはべらむ。今日しも端におはしましけるかな。(14)この上の聖の方に、源氏の中将の、瘧病まじなひにものしたまひけるを、ただ今なむ、聞きつけはべる。いみじう忍びたまひければ、知りはべらで、ここにはべりながら、御とぶらひにもまでざりける」とのたまへば、「あないみじや。いとあやしきさまを人や見つらむ」とて、簾おろしつ。「この世にののしりたまふ光源氏、かかるついでに見たてまつりたまはむや。世を捨てたる法師のここちにも、いみじう世のうれへ忘れ、齢のぶる人の御ありさまなり。(15)いで御消息聞こえむ」とて、立つ音すれば、帰りたまひぬ。あはれなる人を見つるかな、かかれば、このすきものどもは、かかるありきをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり。たまさかに立ち出づるだに、かく思ひのほかなることを見るよ、と、をかしうおぼす。さても、いとうつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人の御かはりに、明け暮れのなぐさめにも見ばやと思ふ心、深うつきぬ。

（中略）

(16)御迎への人々参りて、おこたりたまへるよろこび聞こえ、内裏よりも御とぶらひあり。僧都、世に見えぬさまの御くだもの、何くれと、谷の底まで掘り出で、いとなみきこえたまふ。「今年ばかりの誓ひ深うはべりて、御送りにもえ参りはべるまじきこと、なかなかにも思ひたまへらるべきかな」など聞こえたまひて、大御酒参りたまふ。「山水に心とまりはべりぬれど、内裏よりおぼつかながらせたまへるも、かしこければなむ。今、この花のをり過ぐさず参り来む。

宮人に行きて語らむ山桜風よりさきに来ても見るべく

（中略）

聖、御まもりに、独鈷たてまつる。見たまひて、僧都、聖徳太子の百済より得たまへりける金剛子の数珠の玉の装束したる、やがてその国より入れたる筥の唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝に付けて、紺瑠璃の壷どもに、御薬ども入れて、藤、桜などに付けて、所につけたる御贈物ども、ささげたてまつりたまふ。(17)君、聖よりはじめ、読経しつる法師の布施、まうけの物ども、さまざまに取りにつかはしたりければ、そのわたりの山がつまで、さるべき物ども賜ひ、御誦経などして出でたまふ。

（中略）

御車にたてまつるほど、大殿より、「何方ともなくておはしましにけること」とて、御迎への人々、君達などあまた参りたまへり。頭の中将、左中弁、さらぬ君達もしたひきこえて、「かうやうの御供は、つかうまつりはべらむ、と思ひたまふるを、あさましくおくらさせたまへること」と、うらみきこえて、「いといみじき花の蔭に、しばしもやすらはず、立ち帰りはべらむは、飽かぬわざかな」とのたまふ。(18)岩隠れの苔の上に並みゐて、土器参る。(19)落ち来る水のさまなど、ゆゑある滝のもとなり。頭の中将、懐なりける笛取り出でて、吹きすましたり。弁の君、扇はかなうちうち鳴らして、「豊浦の寺の西なるや」と歌ふ。人よりは異なる君達を、源氏の君、いといたううちなやみて、岩に寄りゐたまへるは、たぐひなくゆゆしき御ありさまにぞ、何ごとにも目移るまじかりける。例の、篳篥吹く隋身、笙の笛持たせたるすきものなどあり。僧都、琴をみづから持て参りて、「これ、ただ御手一つあそばして、同じうは、山の鳥もおどろかしはべらむ」と、切に聞こえたまへば、「乱りごこちいと堪へがたきものを」と聞こえたまへど、けにくからずかき鳴らして、皆立ちたまひぬ。（1）

次に、大雲寺のことについて語っている中村真一郎氏と角田文衛氏の対談を挙げる。

中村　それから少年の源氏が若紫を見初めた北山の寺というのは、従来の定説で鞍馬寺ということになっていましたけれども、先生は別なところを発見されたんでしたね。

角田　少し山深い、つづら折りの道を上ったところと書かれてあることだけが強調されまして、それが鞍馬寺へのつづら折りの道ではないかということから、北山の某寺は鞍馬寺であると中世以来の注釈家によっていわれてきましたが、当時の鞍馬寺は真言宗で、あまり振わない寺でした。院政時代になって宗旨がかわって天台宗となり、延暦寺に属したころから寺運がひらけてきました。「北山の某寺」は、鞍馬寺ではぐあいが悪いんです。と申します

のは、鞍馬寺からは絶対に都が見えないんです。これは都からの距離が十キロありますし、前に高い山があるので、[20]いくら高いところに上っても、鞍馬寺からは都は見えないということです。それからもう一つ、源氏が寺で一晩明かすと、源氏の病気を心配したみんなが都から集まって、滝のほとりで車座になって酒を飲んで寺の人たちに被物（かずけもの）（祝儀）をしますが、もし鞍馬寺なら使いの者が行って、すぐ酒とか食べ物を持ってくるというような距離じゃありませんからね。

また、紫式部との関係ということを考えると、前にも申しあげましたが（注(1)）、この某寺こそ彼女のひいおじいさんの中納言文範が創建した大雲寺というお寺にほかなりません。大雲寺は当時、非常に栄えていまして、三井寺派――寺門派の拠点だったんです。寛弘五年の、一条天皇の中宮彰子のお産のときにも、観音院の僧正が主として祈祷をしていますが、観音院というのは大雲寺の塔頭なんです。仁和寺と大雲寺に観音院がありますけれども、別々でございまして、あの観音院の僧正といわれるのは、大雲寺の観音院に止住した権僧正の勝算（しょうさん）のことなんです。この大雲寺は非常に大きなお寺だったんですが、これは中納言文範が大きくしたんじゃなしに、前講でも申しましたが（注(2)）寺門派の僧侶たちが山門派と袂を分かって、憤然として山を下ってきたんですが、昌子内親王を初めとして非常に支持者が多かったので、たちまち大きな伽藍が建って、幾棟もの塔頭のある一つの大きな寺院になったわけです。

（注(1)(2)）**角田**　文範というのはなかなかの人で、能吏として知られていました。この人が寺門派（三井寺派）の大雲寺というお寺を岩倉につくっており、なにかにつけてそこに紫式部などを連れていったと想像されるんです。

中村　大雲寺は別荘のようにつくってあったんですか。

角田　初めは別荘です。あのへんは小野といいまして、小野の山荘だったんですが、それをお寺にして大雲寺と名づけ、孫の文慶大僧都に提供したのです。

中村　自分が生きているうちにですか。

角田　ええ。ところが、ちょうど比叡山で、寺門派と山門派の争いが激化しまして、寺門派の連中がみんなで寺の古い鐘をかついで、憤慨しておりてくるわけです。そして、寺門派の僧たちは園城寺その他を拠点にして、山の延暦寺と鋭く対立する。そのとき大雲寺は寺門派の大きな拠点になったんです。もう一つは、冷泉天皇（在位九六七－九六九）の皇后の昌子内親王が、大雲寺の後援者になった。いまもそこに御陵があります。

そういうことから紫式部は、絶えずひいおじいさんにお寺に

連れていかれたと思われるんです。大雲寺の地形は、いま行ってもわかるように源氏が幼い若紫を初めて見かけた北山の某寺（なにがしでら）というのとそっくりです。これは後にモデルの話としてお話することになるでしょうが、実際に「若紫」の帖を持ってその場に行ってみられたら、ひしひしと感じられるはずです。

今日そこに行ってみますと、ちょうどそこの水飲堂という[21]小さい御堂の脇から西の方の山に向かって、だらだら坂が続いておりまして、しばらく行くと岩屋がある。紫式部は、源氏がその岩屋にいた聖（ひじり）に加持祈祷を受けたといっているわけです。私どもはその岩屋を発掘しましたけれども、これは目ぼしい結果が得られませんでした。為頼や為時と親しい慶滋保胤は出家して、法号を寂心といい、聖をして大雲寺にいたこともあります。

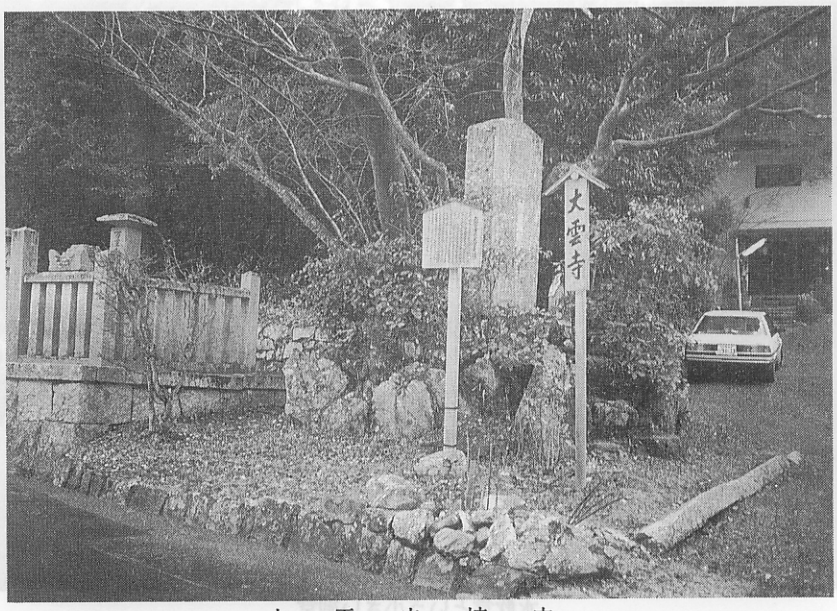
で、[22]この岩屋は、むしろ岩陰といったほうがいいんですが、そこに差掛小屋（さうかけ）をつくって聖がいたと思うんです。慶滋保胤の寂心ばかりでなく、多くの聖が大雲寺にいたようです。聖というのは、出家はしてもお寺に直接属さない、アウトサイダーですね。

中村　僧籍には入っているんですか。

角田　入っていますけれども、一つのお寺に属さないんです。寺で世話になるとかいうことはときにはあっても、普通は飄々とし

水飲堂という小さい御堂

て、あっちへ行ったり、こっちへ来たりしている。空也などはそのはしりですね。今日でいうと在家仏教ですか、今日の人は出家していませんけれども、とにかくそういうような聖がいて、光源氏はその人に加持祈祷をしてもらったというわけです。そして、その岩屋から後ろの山に上がって都のほうを見て、「絵にいとよくも似たるかな」などといいながら、おそらく、藤壷はどうしているだろうとか、いろいろ思いにふけったんでしょうが、大雲寺からは実際にちょうど前の山の鞍部を通して都が見えるんです。急な山ですけれども上に上るとよく見えるんです。これなら「若紫」にある描写とそっくりでしょう。だらだら坂を西から東に行くと、僧都の家があって、そこに老尼がいて、若き紫の上がいた。そういう記述を考え合わせると、いかにもこれならとおもえるんです。彼女は大雲寺付近の地理をよく知っていますしね。そういうことから私どもは、紫式部は大雲寺を念頭において北山の某の寺を描いたんだろうと考えるわけです。大雲寺ほど「若紫」の描写そのもので、かつ紫式部の一族と関係の深い寺は、北山方面には他には求められないのであります。(2)



大　雲　寺　境　内

雨の中を訪ねる初見の道は見え難く、岩倉駅より歩いて十五分という交通公社の案内を遥かに越えて辿り着いた寺には、大雲寺霊園とあるばかりで、(2)「寺のさまもいとあはれなり」とある、その堂塔は無かった。霊園の傍には、寺院再建の為として建っている堂守に似た、社務所ならぬ寺務所と覚しい建物がある。そこで尋ねて、左北の方、精神科を持つ二棟の病院の間を抜けて少し行くと、角田氏の言葉に見える「水飲堂という小さい御堂」に行き会う。そこから左に取って山道を五十米程登りますと大きい岩があります。その岩の前に大きい樹が一本、目印のようにあります。皆さん、そこを訪ねて来られます、という寺務所の人の言葉通り、(21)「小さい御堂の脇から西のほうの山に向かって」、雨に滑ってかなり難渋する獣道を暫らく行くと、右に太い樅かと覚しき樹があり、その上に、頭部のやや出っ張った大きい岩がある。

角田氏の言われる通り、それは(22)「岩屋というより、むしろ岩陰といったほうがよく、そこに差掛小屋をつくって聖がいたのであろう。」その人に光源氏は加持祈祷をしてもらったと紫式部は言っている訳であるが、(3)「峯高く、深き巌の中にぞ、聖入りゐたりける」という高みには、それは無い。従って、僧都が、(14)「この上の聖の方に、源氏の中将の、瘧病まじなひにものしたまひけるを、ただ今なむ、聞きつけはべる」という、「この上の聖の方」に並んで在る(4)「高き所に」源氏が立ち出でて見渡せば、(5)「ここかしこ、僧坊どもあらはに見おろさるる、」そして、(7)「きよげなる童女などあまた出で来て、閼迦たてまつり、花折りなどするもあらはに見ゆ」と描かれているような、「あらは」な俯瞰の光景は望めない。(6)「ただこのつづらをり」の続く、その上の「高き所」でなければ、つまり、清少の「近うて遠きもの」の一つとして「鞍馬のつづらをりといふ道」と言った、その「つづらをり」の上の高みにある鞍馬寺でなければ、それは、望み得ない俯瞰の景ではないだろうか。

岩屋から後ろの急な山に上がって都のほうを見ると、実際にちょうど前の山の鞍部を通して都がよく見える。それは「若紫」にある描写とそっくりだ、と角田氏の言われた、急な山は、雨で滑る獣道に足を取られて思うように動けず、登ることを断念せざるを得なかった。それゆえ、氏の言われるような、都をもとり込んで視界のよく利いた眺望は確かめるべくもなかった。

しかし、(8)「後の山に立ち出でて、京の方を見たまふ。はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなうけぶりわたれるほど、絵にいとよくも似たるかな」と描かれてゆくこの光景は、「京の方」を見たまふ、とだけであって、都のたたずまいをも確かに視野に収めたそれであるとは急には断じかねるように読める。

(20)「いくらか高いところに上っても、鞍馬寺からは都は見えない」

と角田氏の言われる、その見えぬ都を視界の彼方に置いて、北山の春は既に夏の芽ぶきを迎えて、茫漠と霞み渡っている。それを「四方」に見て、作者は、(8)「絵にいとよくも似たるかな」という、地の文に本来は使われない嘆辞の「かな」表現を文末に据えて、源氏の感嘆の気持ちを直截に写してゆく。それは、(9)「かかる所に住む人、心に思ひ残すことはあらじかし」と思わずに言う源氏の、思うことの多い京の生活を遥かの視野の彼方に置いて、今臨み得ている山人のたつきの自在に寄せる羨望の言葉ではないか。この時、都は必ずしも源氏の視野の中に在ったとは言えないのではないだろうか。

また、「北山の某寺」は、鞍馬寺ではぐあいが悪い「もう一つ」の理由として、角田氏の挙げられた、都との距離の問題であるが、(17)「君、聖よりはじめ、読経しつる法師の布施、まうけの物ども、さまざまに取りにつかはしたりければ、そのわたりの山がつまで、さるべきものども賜ひ、御誦経などして出でたまふ」とある、その「布施」や「まうけの物ども」は、前日に京に「取りにつかはしたりけれ」ば、その使いの者が、直前にある源氏の邸からの(16)「御迎への人々」と共に持参して来たのであろう。更に、源氏の舅の左大臣に言われて、その子息たちの頭中将らが迎えにやって来て、(18)「岩隠れの苔の上に並みゐて、土器参る」と言う、その酒とか食べ物も、当然迎えの彼らが持って参上したものと考えるのが自然であろう。都から鞍馬寺までの距離は十キロ。それらの「寺の人たちに対する被物（祝儀）」や「酒とか食べ物」やを、直ぐに行ってもってくるというような距離じゃない、と考えなくともよいのではないだろうか。このあたりの文章は、虚心に辿れば上述のように読めると思うのだが、どうであろうか。

私の初見の印象では、「若紫」の冒頭部が描く、「北山」のたたずまいに比定するには、大雲寺の山はどうみても浅すぎるという思いを拭い切れないのであるが、どうであろうか。

「若紫」の冒頭部には、滝の描写が一度ならず出て来る。最初は、思いもかけずに垣間見ることになった少女の紫の上のことを思うて眠れぬところに、

君はここちもいとなやましきに、雨すこしうちそそき、山風ひややかに吹きたるに、滝のよどみもまさりて、音高う聞こゆ。

とある。そして二度目は、眠れぬままに朝を迎えて、

暁がたになりにければ、法華三昧行ふ堂の懺法の声、山おろしにつきて聞こえくる、いと尊く、滝の音に響きあひたり。

吹きまよふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな

と僧都に歌を贈るところに、そして三度目は、行先も告げに来た源氏を「したひきこえて」迎えに来た左大臣家の子息たちと「いみじき花の蔭」を捨てては帰り難しとて、(18)「岩隠れの苔の上に並みゐて、土器参る」、そこは、(19)「落ち来る水のさまなど、ゆゑある滝のもとな

り」とある。

高い所から落ちて来ると言い、うちそそく雨にまさるよどみと言い、山おろしにつきて聞こえくる懺法の声に響き合ひたりと言う、それは、かなりの水量を予想させる滝の描写であるが、そういう滝が大雲寺の山にかかっていたとは、どうにも考え難い。前述の「水飲堂」から登って行く獣道の左に、道に沿うて確かにずっと流れは続いてあるが、それは渓流とも言えない細い水流である。源氏の訪れた春の季節の雪解けの水を計算に入れても、そういう水量の滝の存在を描くには、大雲寺の山は浅すぎるのである。

「山が浅い」と言えば、「若紫」の巻頭少しのところに、

(1)やう深う入る所なりけり。三月の晦日なれば、京の花ざかりはみな過ぎにけり。山の桜はまださかりにて、入りてもておはするままに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、

とある条について、「若紫巻での季節指標には桜が用いられている」として、高橋和夫氏に次のような言葉がある。

この北山の「なにがし寺」に、岩倉の大雲寺を当てる説が、角田文衛博士の提言以来、一説に行われているが、この桜の散花時期に関する限り、大雲寺では無理である。私はこのことを確かめるために、ひととせ、散花を求めて、京と大雲寺に行ったが、その相違は意識に上るほどではなかった。この「なにがし寺」は紫式部時代にもすでに参籠所として著名な鞍馬寺を、旧説に従って当てる外はない。鞍馬の桜は京の桜に比べて五日程遅れていると見てよい。正しくこの文章がそのまま当てはまる。(3)

この度の『源語』の遺跡探訪の旅は、その殆んどが角田氏の文章に導かれてのものであって、氏より受けた学恩は、私にとっては今回に限らず甚大であるのだが、この大雲寺に関する限りは、上述のような懸念を拭いきれなかったことを遺憾に思っている。

敬体表現というもの

源氏は「北山のなにがし寺」で、ある僧都の庵室に老尼の祖母と共に身を寄せていた、幼い紫の上を見そめる。彼女は、源氏が「かぎりなう心を尽くしきこゆる人」藤壷に、「いとよう似たてまつれる」かたちを持っていた。その「うつくし」きかたちに、源氏は思わずも目を奪われて、涙を流すのであった。その条を、作者は、

(13) つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かなと、目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似たてまつれるが、まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。

と、源氏への待遇表現を落して書いてゆく。はじめに、(10)「日もいと長きに、・・・かの小柴垣のもとに（源氏は）立ち出でたまふ」とあり、続いて、(11)「なかなか長きよりもこよなう　今めかしきものかなと、（源氏は）あはれに見たまふ」とあって、(12)「尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるところあれば、子なめりと（源氏は）見たまふ」そして、(13)「ねびゆかむさまゆかしき人かなと、（源氏は）目とまりたまふ」と、その敬体表現を克明に当てて来ながら、こゝに来て突如として、それを落すのである。河内本の系統本に於いても「と思ふに、泪ぞこぼれぬる」とあって、こゝに来てその待遇表現を落していることに於いては同じである。

また、少女と老尼の応接を描いたこの場面の直ぐ後に来る、源氏の聖の方に帰っての独り居の思いを描く条に於いても、この事は同断である。

(15)「（前略）いで御消息聞こえむ」とて、（僧都の）立つ音すれば、（源氏は）帰りたまひぬ。あはれなる人を見つるかな、かかれば、このすきものどもは、かかるありきをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり、たまさかに立ち出づるだに、かく思ひのほかなることを見るよ、と、をかしうおぼす。さても、いとうつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人の御かはりに、明け暮れのなぐさめにも見ばやと思ふ心、深うつきぬ。（河内本は、「深う」の修飾語がなくて、「と思ふ心つきぬ」とある。）

私はかつて、ここの「と思ふにも涙ぞ落つる」について、源氏への敬意表現が落ちていることの不審を述べたことがある。それに対して、友人の森一郎君から、玉上博士の御考え（「敬語の文学的考察」『源氏物語研究』に所収）を引きながら、「敬語のないのは、主人公の心情の切迫を表現するものではないでしょうか」という示唆をもらった。

（4）

敬意表現は確かに、それを意識してゆく対象の前に、語り手の客観的な視座を設けてゆくものだ。主人公の心情の切迫を思えば、その対象の毀誉褒貶に働く客観的な視座は当然、放擲されるであろう。作者は、そこでは対象を表現の客体として見ることを止めて、対象の思いに主情的に自分の気持ちを密着させて書いてゆくことになる。

源氏の独り居の思いを描く後の場面の条がその好例である。

ところで、「若菜上」にも、これは女主人公の女三の宮に対する敬意表現を欠いているところがある。

鞠に身を投ぐる若君達の、花の散るを惜しみもあへぬけしきどもを見るとて、人々、あらはをふともえ見つけぬなるべし。(5)

柏木が女三の宮を、垣間見ることになる六条院での蹴鞠の日の場面である。

佐伯梅友博士は、ここの条を、「まりに熱中している若い君達が、(まりのために)花の散るのも惜しがっていきれないほどになっているのを見ようというわけで、女房たちも、このまる見えになっているのを、ふっとみつけることもできないのであろう。」と口訳された上で、「あらは」について、「こゝでは「あらは」が名詞として用いられている。猫の綱ですだれが引き上げられて、まる見えになっているのをいう。」と注されている。(6)

玉上博士は、「鞠に熱中している若殿原が、花の散るのを惜しみもしない様子を見るとて、女房達はまる見えなのに、急には気づかないのであろう。」と口訳され、「これは実に「乱りがはしき」骨頂だ。内親王ともあろうものが、御簾のそばまで出て男をのぞくとは。女房の報告を聞いていればよいのである。しかも立っている。『源氏物語』のなかで女君の立ち姿は幾か所あろうか。はなはだ不作法である。」と、その「あらは」の状況を具体的に説明されている。(7)

これらに対して、丸谷才一氏は、大野晋博士との対談の中で示された口語訳で、「女房たちは、蹴鞠に夢中な若殿方が落花を惜しむ暇もない様子を見ようとして、自分たちがまる見えなのにすぐには気づかないのだろう。」と訳して、柏木や夕霧の方から「まる見え」になっている「あらは」の対象は、女三の宮付きの女房達だとみておられる。(8)

それは、吉澤義則博士が、『対校源氏物語新釋』の中で、この条に傍注されて、「女房達は御簾があいて女三の宮が丸見えであるのに気づかぬのであろう。」と「あらは」の対象を明確に、女三の宮と特定されているのと相対する。(9)

口語訳でみる限り、佐伯博士と玉上博士は「あらは」の対象を特定することを避けておられるが、こゝは疑いなく、吉澤博士の傍注に従うべきものと思われる。と言うのは、この条に直接する後文は、

猫のいたく鳴けば、見返りたまへるおももち、もてなしなど、

いとおいらかにて、若くうつくしの人やと、ふと見えたり。(10)

と、柏木らがふと見て取った女三の宮の「あらは」な表情や姿態を明確に描いてゆくからである。

丸谷氏は恐らく、後文に「見返りたまへる」と女三の宮への待遇表現が見える、そのことと見合わせて、こゝにも当然、女三の宮への敬意表現として、「御あらは」とでも言う敬意の接頭辞があるべきである、がそれが見えぬところから、この「あらは」の対象を女房たちと判定されたのであろう。

敬意表現は、時にあってそれを取捨することで、語り手が表現対象に対して持つ毀誉褒貶の気持ちを表出するのに働くことがある、そう言うことは許されるのではないか。玉上博士の説明された、内親王ともあろうものが常軌を逸した行動に出る、その女三の宮の不作法極まる行為に対する作者の、それは同時に物語読者と共にするものであるが、その咎め心が、こゝの敬意表現の欠落に見えている、とそう読むことが出来るのではないか。

濁りを加えることについて

雪は所々消え残りたるが、いと白き庭の、ふとけぢめ見えわかれぬほどなるに、「なほ残れる雪」と忍びやかに口ずさびたまひつつ、御格子うちたたきたまふも、久しくかかることなかりつるならひに、人々も空寝をしつつ、やや待たせたてまつりて、引きあけたり。(11)

女三の宮を南の御殿の寝殿に迎えて、「夜離れなくわたりたまふ」て三日目の夜、紫の上の夢に脅えて、源氏は、まだ夜も深い明けぐれの時間に、東の対の屋の格子をたたく。そんな源氏を懲らしめようという積りか、紫の上付きの女房たちは一斉に狸寝入りを決め込む。そして、雪の残る寒い二月の戸外に「やや待たせたてまつりて」、ここは、「(格子を)」引き上げたり」か、または、「(妻戸を)引き開けたり」か。

丸谷氏が大野博士との対談の中で示された口語訳は、「女房たちは意地わるにもしばらく寝たふりをして、お待たせしてからお入れ申上げる」とある。(12) 原文は「引き上げたり」の表記を採りながらも、巧みな口訳の処理である。

「女房たちも、寝たふりをして、源氏の朝がへりを憎ん」で「やや待たせ奉りて（格子を）引き上げたり」とあるのは『新釈』。（13）

『新潮日本古典集成』も、「女房も源氏を懲らしめようというつもりで、しばらくお待たせしてから、（御格子を）引き上げたり」とある。（14）

玉上博士は、「女房連中も寝たふりをしてしばらくお待たせ申してから格子を引き上げた」と「（格子を）ひきあげたり」の表記で口訳される一方で、「語釈」の項では、直後の「おぢきこゆる心」に触れて、「諸説がある。「きこゆ」は紫の上に対する敬語だが、主語は源氏か女房かである。女房だと、紫の上をこわがって妻戸をあけず、自分を困らせたのだろう、罪もなしや、かわいいもんだ、となる。源氏だと（後略）」と注して、「格子」と共に「妻戸」にも拘っておられる。（15）

「（格子を）引き上げたり」となると、これは一枚の蔀格子である。上下二枚の格子では、下の格子は掛金でとめたままにしておくか、取りはずしたりするのであって、（16）「引き上げ」るのは上の格子だけである。これでは下の格子に隔てられて源氏を「お入れ申上げる」ことは出来ない。

柱間の一間ごとに入っている一枚の蔀格子だと30キロ近くになるという。これを内側の廂の間に釣り上げるのは、夜陰の扱いとしては雑作に過ぎる。それで、玉上博士の拘わられたように、こゝは開閉の容易な「妻戸」であったのではないかと、という気もする。そうなれば、表記も濁りを加えることなく、元の書写のままに読むことが出来る。そうなると、状況は解釈に於ける濁点の処理の問題になって来るわけであるが、この条はやはり、濁点を加えて、「（格子を）引き上げたり」と読むべきところだろう。

その方が、女房たちの意地悪に迫真性が出て来る。女房たちは、源氏の「久しくかかることなかりつる」そのことの「ならひ」の中で、六条院にあった生活の秩序が乱されることを許せない。「昔は、（源氏が）ただならぬさまに使ひならしたまひし（中務や中將の君などと言ったお手つきの）人どもは、（源氏の須磨に亡命の時のあれ以来、紫の上方にお仕えして）皆心寄せきこえたる」（17）その「ならひ」の中で、自分を殺してきた、それだけに、今ごろになっての源氏の朝帰りは許せないのである。

それで、他の女房たちと力を合わせて、声を合わせて、どっこいしょ、と嫌味たっぷりに重い一枚格子を引き上げる。「夢枕に立たれて、帰ってきて女房たちに意地悪される」。（18）その夜陰の、嫌味たっぷりなあてつけがましい女房たちの扱いから生まれる、多分にコミックなこの光景は、この条に濁点を加える、その一筆の読みによって、見事に完成するのである。

反対に「濁り」を加える、その一筆で場面を読み誤ることもある。

先述の、六条院の蹴鞠の場面がそれである。

猫は、まだよく人にもなつかぬにや、綱いと長く付きたりけるを、ものにひきかけまつはれにけるを、逃げむとひこしろふほどに、御簾のそばいとあらはに引きあげられたるを、とみにひき直す人もなし。(19)

丸谷 ただ、猫がからんだ綱のせいで御簾の具合がおかしくなるところ、ぼくはどうもピンとこないんです。小学館版『源氏物語』の注釈でも、これは秋山虔氏がお書きになったと思うんですが、「わからない」と書いてある。正直な方ですね(笑)。普通の国文学者はこう書かないですよ。

大野 そうですか。

丸谷 わかったようなふりをするもんです。

大野 猫二匹、大きいのと小さいのとがいる。それが追いかけ回ってもつれたから紐がひっかかってああなったんだと思うんだけど、作者はそこを決してリアルに具体的な説明はしていない。(中略)

ここは確かに具体性に欠けるところはある。大体、この物語自体、人間の動作は正確には描写してないんですよ。

丸谷 そうなんです。人間の動き方の描写に比べれば、猫の動き方の描写がこの程度だからと咎めるわけにはいかない。ただし、われわれは、人間の動きについてはよく知っているけれど、猫の綱と御簾との関係をあまりよく知らないわけです。平安朝の読者は御簾の具合がよくわかっていた、とは言えますね。

大野 だからこれでもいいのかもしれない。

丸谷 なぜか話は白熱しますねえ、このへんは。(笑)(20)

私は、ここの場合の読みの不確かさ、不明瞭さを解く鍵はやはり、この条に「濁り」を加えることの当否にあると思う。

御簾のそばいとあらはに引きあげられたるを、とみに引き直す人もなし。

(みすのはしが引きあげられて中がまる見えになったのを、急に直す人もいない。)(佐伯梅友氏『源氏物語講読上』)

御簾のそば、いとあらはに引きあげられたるを、とみに引きなほす人もなし。(吉澤義則氏『対校源氏物語新釈巻三』)

御簾のそばいとあらはに引きあげられたるを、とみにひき直す人もなし。

（御簾の端がはっきり中が見えるほど引き上げられたのを、直ぐに直す人もいない。）（玉上琢彌氏『源氏物語評釈第七巻』）

御簾のそば、いとあらはに引き上げられたるを、とみにひきなほす人もなし。

（同氏『源氏物語』角川日本古典文庫　第八巻）

右に挙げた如く、この条に、

御簾のそばいとあらはに「引きあげ（上げ）られたる」を、

と濁点を付す、その読みでは、秋山氏の書かれた通り、綱のせいで御簾の具合が、どうおかしくなったのか、「わからない」と思う。

「猫がからんだ綱のせいで御簾の具合がおかしくなるところ、ぼくはどうもピンとこないんです」と言われながらも、丸谷氏は、この条に濁点を加えずに、

御簾のそばいとあらはに引き開（あ）けられたるを、

という表記を採って、

御簾の横の端が引き開けられ、なかがまる見えになったが、急いで直す人もない。(21)

と、的確に注されている。これは、『集成』が、

御簾のそばいとあらはに引きあけられたるを、

として、

御簾の横の端がはっきり中が見えるほど引きあけられたのを、(22)

と傍注しているのと同じである。

玉上氏も、表記と口訳の両方を「引きあげ（上げ）られたるを」とされながらも、鑑賞の項では「そこに猫が走り出る。綱で御簾がめくれる」(23)と説明されている。「めくれる」は、「御簾が引き開けられたる」、その結果を説明されたものであろう。こゝはやはり、綱で「御簾が上がった」のではなく、「引き開けられ、めくれた」のである。丸谷氏の言われる通り、現代人である私も、平安朝の読者のようには、猫の綱と御簾との関係をあまりよく知らない、つまり、御簾の具合がよく分かっている訳ではないのだが、少なくとも、御簾が、「横にめくれた」とみる方が、この場面の文脈には適正な読みになるのである。

というのは、こゝから一文を隔てた直後の文に於いて、物語は、

几帳の際すこし入りたるほどに、桂姿（うちきすがた）にて立ちたまへる人あり。(24)

と、女三の宮の桂の立ち姿を描いてゆくからである。そこは、柏木と夕霧の居る、寝殿の「御階（みはし）の中（なか）のしなのほど」からは対角線に最も視

界の利く「階より西の二の間の東のそば」であったから、二人は彼女の立ち姿を「まぎれどころもなくあらはに見入」ることが出来たのであった。

その女三の宮の「あらは」な立ち姿は、猫についている綱が前に引かれたために上に張って、「御簾が上がった」というような視界の高さでは捉えられない。それは、綱が左前に引かれてゆく、その角度で、柏木らの居る御階の側の御簾の右横の端が引き開けられ、めくれるという、上下に長い開豁の視界の形でなければ、「見入」ることは出来ない。

その「引き開けられた」御簾の向うに立つ「ここらの人にまぎるべくもあらざりつる」女三の宮の可憐な姿かたちや横顔、そしてかわいい表情や身のこなしなどが、柏木の長い時間の恋情を一挙に「おほけなき」破滅の行為に駆り立てゝゆくのであった。

廬山寺、枳殻邸、野の宮、清涼寺、仁和寺そして紫式部の墓

大雲寺から岩倉駅にとって返し、そこから叡山電車の北の終わりになる鞍馬に降りて、鞍馬寺の堂塔を登って降りて来る間も、雨は止まなかった。

「後の山に立ち出でて、京の方を見」遥かしたという源氏の臨んだ眺望は、雨になずむ足では思いも寄らず、秘かに再訪を期していた、和泉式部の蛍岩を配して流れる貴船川添いに、貴船神社に向って続く北山杉の参道も、叡山電車を宝ヶ池から乗り変えて、山頂の四明嶽に至る叡山西麓の八瀬遊園やそこから一乗寺にかけて広がる小野の地——こゝには、落葉宮の母一条の御息所の山荘があり、その山荘に近く、浮舟の身を寄せた横川の僧都の妹尼の庵室もあったという——その『源語』の遺跡も、雨に暮れる行程では、訪れてみるすべもなかった。

十二月二十一日、月曜日、京の空に雲は厚かったが、雨は既に無かった。

府立医大病院前で市バスを降り、そこから左西に道をとって四、五分の余を歩く。そこに京都御苑の東に隣接して、『源語』遺跡探訪第

二日目の目的地の第一、「廬山天台講寺（通称廬山寺準門跡）は在った。

廬山寺は、天慶元年（938）、元三大師（慈恵大師）によって船岡山に創建され、元亀二年（1571）、織田信長の焼打ちをまぬかれて、現在地に移建された。その移建までは「古の紫野の斎院跡」に在ったと言われるその堂宇は、皇室直属の摂家門跡として唯一残存する寺だという。(25)

この廬山寺が移って来るまでの、現境内の地に紫式部は住んだ。彼女の父方の曾祖父の権中納言藤原兼輔は、京極大路の東、土御門大路つまり土御門の東への延長線の北で、加茂川の堤に接した空閑地――今の廬山寺のあたり、上京区寺町広小路上ルの地――を購入し、これを「堤第」と名づけた。(26)

紫式部は、その邸に育ち、そこで宣孝の通いを待ち、一人娘の賢子を生んだ。そして、その邸で、『源氏物語』を書き、『紫式部日記』の筆を執り、『紫式部集』を編んだ。

角田文衛博士によって考証された、その遺跡は邸の東端に『源語』執筆の部屋を配している。その部屋の右前面に広がるのが「源氏庭」である。平安朝の庭園の感じに作庭されたというその「源氏庭」は、いま、深々とした苔の広がりを池庭の趣きに作って、快い広さと諧調を持って、年の終わりの静謐の中にあった。

源　氏　庭

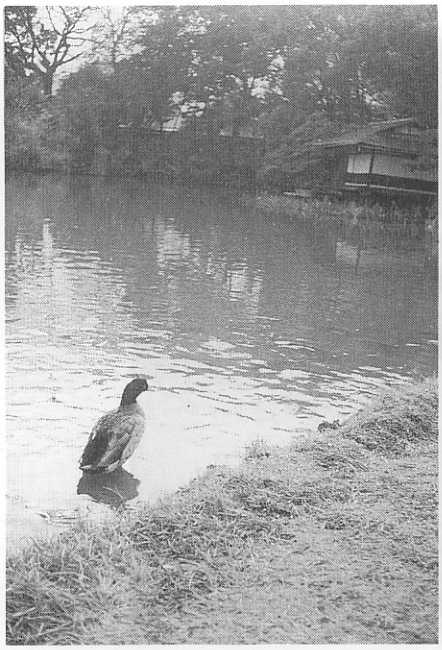
京都駅から歩いて北に七・八分、東本願寺の総門の前から河原町通りを越えて東に三・四分のところに枳殻邸は在る。

こゝは元、右大臣源融が奥州の塩釜の風景を模して営んだ彼の別邸の「河原院」の跡という。「新潮」の『古典文学アルバム』や『古典集成』は、こゝを、夕顔が急死した「なにがし院」のモデルの場所と想定しているが、こゝは、六条御息所の邸宅をその東南部に配する、源氏の「六条院」のモデルとなったところではないか。

角田氏の考証されるように、夕顔の急死する「なにがし院」は、五条に在った源氏の乳母の隣家の夕顔の宿と河原院の中間に在った、具平親王の別邸、当時は荒廃していた、「千種殿」ではないか。「そのわたり（五条の辺）近きなにがしの院におはしまし着きて」という「そのわたり近き」というのは、三・四百メートルぐらいのことであって、河原院までは距離があり過ぎる。(27)

「源氏は、六条御息所の邸へ通うのに、自分の家から西洞院をまっすぐ下ってきて、途中で乳母の家で休憩した。その隣が夕顔の家で、今度は夕顔を連れて「そのわたり近き某の院」へ行った。某の院のモデルは、まさに千種殿であって紫式部はよくこの御所を知っていたのです。」(28)

「河原院は、これを営んだ左大臣源融のころは、立派な別邸でしたけれども、紫式部のころには分割されていまして、その一つの部分が



枳殻邸の園池

枳殻邸の一隅

左大臣源重信の邸宅となっていました。この源重信の妻は紫式部の父為時とはいとこでしたし、息子の源相方は紫式部の伯父の為頼の聟でありました。ですから紫式部は、河原院のこともよく知っていたわけです。」(29)

その河原院跡を源氏の「六条院」のモデルとして想定してみると、この枳殻邸は、その創作のモチーフによくそぐうているように思える。邸の門の手前に低く標札して、「枳殻」は「からたち」の別名(漢名)とあったが、邸内にその「からたち」の樹は見えず、庭の標示は「渉成園」と読めた。今は東本願寺の別邸として、大谷家の管理するところと聞くその庭園は、自然のおもむくままに任せて一種荒廃の美観を呈している。

それは、四町に及んだという六条院を想うに足る広壮な園池で、それが半ば荒れるがままに、自然の推移にゆだねられているのが良い。そこには、長い時間の果てに見る蒼古とも言うべき「負」の美観があった。そして、四囲を高いビルに囲まれながら、街の音は遠く、心なしにや、平安の昔に通う深い静謐がこゝにもあった。

斎宮の野の宮は、嵯峨の有栖川のほとりにその都度設けられたという。(30) 秋好中宮が斎宮としてそこに潔斎する生活の中で、起居を共にした六条御息所を源氏が訪ねたという、その野の宮の場所を、作者は有栖川のどのあたりに求めたのだろうか。今残る野の宮は、嵯峨野を巡る路のその傍に、黒木の門を入って直ぐに在る小さい宮である。川と言えば、愛宕山の麓を流れる川を、嵯峨のあたりでは大堰川、少し下って桂のあたりでは桂川とも西河ともいう。(31)

明石の君が幼い姫君と住んだのが、この大堰川のほとりであった。野の宮から落柿舎そして二尊院と来て、その山門を入った境内の直ぐの所に茶店がある。そこの女主人に、大堰川と尋ねても首を傾げるばかり、それは清滝川いうのと違はりますか、と一向に要領を得ない。「京都観光まっぷ」を見ても、桂川、その上流を清滝川、下って保津川とあって、確かに、清滝川、保津川の東を傍流する有栖川はあっても、大堰川の名は見えない。

背後の小倉山に、定家の時雨亭を持つ二尊院から祇王寺を経て、化野の念仏寺に立つのは、これで何度目になるだろうか。無縁仏の群落と水子をまつる地蔵尊の前に暫く佇む。そこから引き返して、下りの道を右へ右へと取って至る所が清涼寺である。

その位置は大覚寺の南西、想像していたよりもはるかに大きい寺である。国宝の本堂も、山門もまた壮大、冬空に高く仰ぎ見る本堂の甍は鴟尾からはじまって、大きく流れる弧線を描いて、その末は太い朱の円柱に支えられて、長い時間の中に静まっている。こゝが、出家をした後の源氏の住まいということになっている。

清涼寺本堂

そこから車で十分の地が仁和寺である。ここも山門も、国宝とある金堂も、ともに壮大、その山門より金堂に伸びる寺域は広豁と開けて、山門を入った左に御室桜の群樹を見る。源氏の兄朱雀院は、女三の宮を弟の源氏にあずけて「月のうち（二月中）に御寺にうつろひたまひぬ」と「若菜上」にある。その「御寺」は、この仁和寺に擬せられている、と『河海抄』や『花鳥余情』は言っている。

宇多法皇は延喜元年（901）仁和寺に御室を営み、承平元年（931）御室に崩じた。また朱雀上皇は、天暦六年（952）三月十四日出家、同年四月十五日に仁和寺に遷御、八月十五日崩。『花鳥余情』は、両者を取り合わせて書いたとする。『源語』の朱雀院は、史上の朱雀院と重なる書き方がされているようである。(32)

この開豁の寺域にあれば、仙洞御所に在るよりも、思いは伸びやかであり得たかも知れないな、と聖心など更にない私は、そんな事を思ったりする。

仁和寺を出て、やはり車で十分余、大徳寺に至り薄暮の中に寺域を清める人に問い、その人が通りかゝった主婦に尋ねて、漸くに紫式部の墓の所在を知る。

「新潮」の『古典文学アルバム』には、「京都紫野雲林院の南」とある。「紫野雲林院」は、現在の大徳寺の地にあった。「山城国愛宕郡

（京都市北区）紫野には、その「雲林院」という旧名を伝える天台宗の小さい寺があり、町名としても、「雲林院」（うじい）の名をとゞめている」と説明する『古典文学大系　大鏡』の補注を頼りに尋ねてみた交通公社は、「大徳寺で聞いてみましたが、紫式部のお墓は大徳寺にはないそうです。大徳寺からは離れていて、その場所はよく分からないのですが、今は、宝殊院（ほうじゅいん）というお寺が管理しているそうです」と、その宝殊院という寺の電話も知らせて来た。

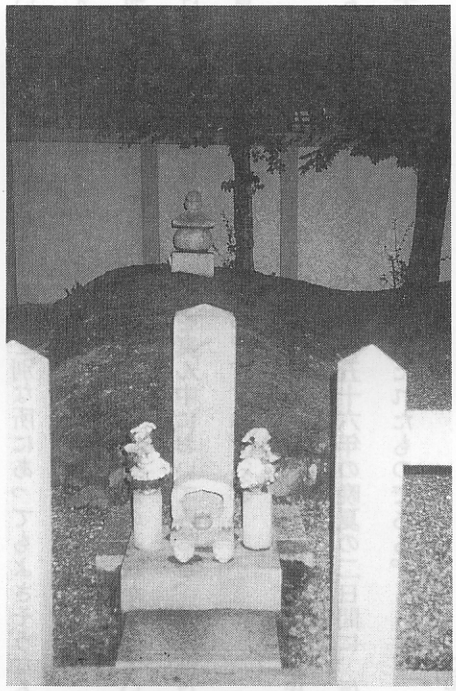
その心許ない探索も、大徳寺で行き逢った主婦の記憶と親切な案内で一挙に成功した。私も四国です、という彼女は、四国の松山から京の街に嫁いで来て、もう四十年経ちました、と言う。ひどく優しい笑顔の女性で、その人に「此処です」と指（さ）されて、思わずあっと声が出た。通りの傍、夕暮れの薄い光の中に『紫式部墓所』とある。

大徳寺から東に歩いて十分、堀川通りに出て南下すること四・五分、暮れいそぐ冬の京の街、広い堀川通りに面して通りの西、直接して直ぐの所に、それはあった。墓前に続く石畳の上に、残りの雨が音もなく来た。

角田　彼女の邸宅は先ほどお話ししたように廬山寺のあたりで、いまは顕彰碑が立っていますが、お墓は北大路堀川を下ったところで、正確に申しますと、京都市北区紫野西御所田町二番地に小野篁（たかむら）の墓に並んでございますね。

中村　それは当時建てたお墓がいまもってあるということですか。

角田　そういうことだと信用してもよかろうと思うんです。というのは、紫式部は、菅原孝標女が女神のように渇仰したごとく、当時から非常に著名な人でしたから、ずっとある程度伝承が残ったんじゃないか。また、彼女のお墓が雲林院の塔頭の白毫院の南、小野篁の墓の西にあるということは、『河海抄』という本に書いてある。つまり、鎌倉時代の末にもうすでに記録されているということです。それから、江戸時代初期の地誌類にも、あそこに紫式部のお墓があるといわれていると書いてある。そういう点をつなぐと、どうも西御所田町二番地の墳丘が彼女の墓らしいということなんです。（33）



紫式部の墓

それから、こういう対談もある。

池田　それにしても、紫式部に限らず、王朝のああいう階級の女たちというものは、みんな終わりはよくわかりませんね。生涯のある時期にあかあかと照明があたっているだけで、それ以後は消えてしまいますね。

清水　記録に出ないというだけでね。

池田　紫式部のお墓はどうですか。

秋山　小野篁（おのたかむら）の墓と並んでいるあれですね。

清水　あれは、昔は現在の大徳寺の境内にあったそうです。私、あのへんのことを調べに行きましたが、大徳寺の近くに松風というお菓子を売っている松屋というお店がありますが、そこのおじいさんに聞きましたら、「私らの小ちゃいときに移したんですよ」と言っておられました。その方は、私が二十年ほど前に聞きに行きました時に六十歳ぐらいでしたかしら。だから、わりと近い昔です。

池田　近いですね。大徳寺のある紫野という地名が、紫式部となんかこう行ったり来たりしているような感じでしょう。あそこに紫式部の産湯の井戸があったり、お墓があったり。

清水　途中でこじつけたのですね。それにしても、なんでまた篁の墓といっしょにあるんでしょうね。篁のお墓もあそこにあるのはおかしいですね。小野氏だから、もっと別な所にあってもよさそうなものですものね。

池田　だけどあの勧修寺家というのは、小野氏の系統から出ているわけでしょう。勧修寺家の系統を真ん中においてみると、紫式部は小野篁と意外に近いところにいるわけですね。(34)

これは対談というより、池田弥三郎、清水好子、秋山虔の三氏による鼎談（ていだん）である。この鼎談は、昭和五十六年の晩夏の二日間に、信州の大学村がある野尻湖畔に於いて持たれたものである。

（完）

和五十七年四月刊）

(注)

(1) 新潮日本古典集成『源氏物語　一』（昭和五十一年六月刊）

(2)(26)(27)(28)(29)(33) 角田文衛、中村真一郎氏『おもしろく源氏を読む』（昭和五十五年一月刊）

(3) 高橋和夫氏『古典に歌われた風土』（平成四年十一月刊）

(4) 拙稿「行ふ尼なりけり」について――若紫巻の一つの読み方――『平安文学研究　第五十二輯』（昭和四十九年七月刊）

(5)(10)(11)(14)(17)(19)(22)(24)(32) 新潮日本古典集成『源氏物語　五』（昭和五十五年九月刊）

(6) 佐伯梅友氏『源氏物語講読　上』（平成三年十一月刊）

(7)(15)(23) 玉上琢彌氏『源氏物語評釋　第七巻』（昭和四十一年十一月刊）

(8)(12)(18)(20)(21) 大野晋、丸谷才一氏『光る源氏の物語下』（平成元年九月刊）

(9)(13) 吉澤義則氏『対校源氏物語新釋　巻三』（昭和二十七年六月刊）

(16)(30)(31) 清水好子、森一郎、山本利達氏『源氏物語手鏡』（昭和五十年四月刊）

(25)『世界最古の文豪　紫式部邸宅遺跡』案内

(34) 秋山虔、池田弥三郎、清水好子氏『『源氏物語』を読む』（昭

高松短期大学研究紀要

第 23 号

平成5年1月31日　印刷
平成5年1月31日　発行

編集発行　高　松　短　期　大　学
〒761-01　高松市春日町960番地
TEL(0878)41－3255
FAX(0878)41－3064

印　　刷　高東印刷株式会社
高松市東山崎町596番地